虹（にじ）

縁側でしゃべりながら

⑰⑧ 庭師 腰掛けのつもりだったけど

自身がかつて携わった富山城址公園で震災の影響を確認する山﨑さん

これからの庭は石灯籠の時代。庭師の山﨑（やまざきこうすけ）広介さん（50）＝射水市＝はそう思っていた。「雑木を並べる庭がしばらくはやったけど、どこか締まらない。人間の意思の象徴が必要なんだよ。それが灯籠かなって。文章に点を打つ感じ」。これから顧客に薦めるつもりだった。

元日の能登半島地震は山﨑さんの計画をいきなりくじいた。各地で灯籠が倒れに倒れた。修繕よりも撤去を求める依頼の方が圧倒的に多い。処分すれば大量生産品も、職人渾身（こんしん）の灯籠も一緒くたにされて粉々に壊される。庭師としてはしのびない。

だから宝珠（ほうじゅ）と呼ばれる先端の丸い部分だけでも、庭の隅に残したらどうかと抵抗する。「だって、その庭を作ろうとしたおじいちゃんやおばあちゃんの思いがある」

ここ数年、石灯籠どころか、庭自体に逆風が吹く。敷地に余裕があっても地面をコンクリートで覆ってしまう人は少なくない。駐車スペースや倉庫など実用性を優先する人もいれば、手入れや草むしりの手間を惜しむ人もいる。

「海や山を見て『いいな』って思うってことは、窓の外に自然を必要としているんだよね。風に揺れる木を１本だけでも植えさせてもらえたら『いらんと思ったけど、やっぱりいるね』と言ってもらえる自信はある」と言う。時代がどうあれ、街と暮らしになじむ庭を造る。山﨑さんの信条だ。

◇

高校時代から英語が得意で、映画が好きだった。とりわけミニシアターで上映される通好みの映画がお気に入りだった。趣味が高じて、字幕翻訳家を夢見た。

京都にキャンパスを構える米国の大学の日本校に入った。講義も試験も全て英語で行われる学校だった。欧米出身で日本に強く関心を持つ教員と、山﨑さんはしばしば一緒に街を巡った。

古都の景観を彩るコケの緑色の諧調や、風化した石は山﨑さんの人生に浸食した。仏教的世界観から此岸（しがん）と彼岸を表す池、石組と石砂だけの枯山水、旅路の風景を織り込んだ構成。パンフレットや案内書を英訳し、庭に潜む切実な意図や、複雑な背景を同行者に伝えた。説明しながら自分もぼんやりと理解した。そのまま庭にほれ込み、しまいには遠い山の稜線まで意味深に捉えた。

大学では英語漬けの毎日だった。当然それなりに語学が堪能になった。欧米の映画を見ていても、字幕なしで筋が追えるし、せりふのニュアンスも分かる。「俺でも字幕がやれそう」。そう思った途端に興味が薄れた。簡単にできることは、人生の仕事にはならない。若さゆえの傲慢（ごうまん）さか。経験が一度もないのに思い込んだ。

就職活動もせずに大学を卒業し、射水の実家に戻った。焦りはない。稼げなくても日本にいれば食うに困ることはない。どうにかなるという無根拠な自信があった。

実家の近所に造園会社があり、社員を募集していた。庭への興味は残っていた。「腰掛けでもいいか」と軽く応募した。

◇

職人の世界は厳しい。山﨑さんは入社初日から公園に連れて行かれた。「お前、あっちから雪つりしろ」と言われた。手順を尋ねたら「学校じゃない」と怒鳴られた。先輩社員は「１回しか教えない」と言うが、そんな簡単なものでもない。「もう１回お願いします」と頭を下げた。そして、怒られた。

理不尽なことばかりだった。もたもたと枝にはさみを入れていると、「他人の家だろ。さっさとやれ」と一喝された。他人の庭だから慎重にやるのだが、そんな理屈は通らない。質も手際の良さも求められた。

一日を終えると、カレンダーに「×」と書き入れるのが日課になった。休日までの日数を数えた。「筋トレして給料をもらっている」と自分を慰めた。しかし、このままではただの丁稚（でっち）奉公だ。続けられない。

先輩を観察して気付いた。剪定（せんてい）する際、出るゴミが技術によって違う。仕事ができる人は切り落とす枝の一つ一つが短い。細かく丁寧に刈り込んでいるからだ。下手な人の周りには大きな枝が雑然と落ちている。

上手な先輩の仕事だけを盗み見て、まねた。５年ほどで自分のイメージ通りに枝を切れるようになった。10年たつと、目の前の作業をしつつも、次の段取りを考えられるようになった。そして15年過ぎ、会社とは異なる自分の方向性に気付き始めた。

会社は自治体の公園や建物の庭の管理を請け負っていた。決まりきった作業も多い。庭を一から造るにしても、設計図通りの仕事を求められる。庭師の裁量はそれほどなかった。段取りをこなす面白さがない訳ではない。しかし、指示通りにやるだけでは物足りなかった。

「縁側に座って施主とああでもない、こうでもないって言ってやりたい」。会社の上役に直談判してみると、「うちでやることじゃない。独立を考えた方がいい」と水を向けられた。「それもそうか」と思った。幸い、個人的に請け負っていた仕事が既にあった。足がかりにはなりそうだった。

屋号は「山﨑広介箱庭設計」とした。風呂敷を広げず、小さな依頼でも引き受けようという思いを込めた。自分がコントロールできる範囲の仕事をやるのだ。

◇

人を雇うわけではないから、大きな仕事はできない。それでも、日暮れまで自然と向き合うのは変わらない。これまでの客の紹介などでそれほど生活には困らなかった。

変わったこともある。演劇を始めた。劇場関係者にがっちりした体格と独特の雰囲気を買われた。勧められるままにオーディションを受け、富山市出身の劇作家・演出家のタニノクロウさんの舞台に立った。主要キャストの流れ者の漁師役に起用された。外仕事で日焼けした真っ黒な肌がはまった。

タニノさんは山﨑さんの演技をこう振り返る。「普段の空間とは違うセットの中で物をつかみ、持ち上げるという何気ない身のこなしが自然とできていた。これが実は難しいこと。庭師という仕事柄なんでしょう。空間把握能力が頭一つ飛び抜けていた」

山﨑さんは演劇を庭造りに重ねる。「ステージでは役者同士がまず作用し合う。その輪が広がるから、客席に座る人に何か伝えられる。役者は庭の石や木と一緒なんだよね。演劇から吸収できるものがたくさんある」。山﨑さんにとって演劇はもう一つのライフワークになった。仲間と今も続ける。

◇

庭師になって四半世紀。「代表作はない」と言い切る。雪山の稜線が青空に映えるように、ただ周囲になじむ庭を目指す。「俺は環境を整えてあげるだけ。それ以降はお客さんのものだし、時間の仕事。達成感はあっても一瞬だけ」。ただ、自分が手がけた庭の様子はいつもこっそり見守る。うまく植物が育っているとニヤニヤ眺める。小さな仕事でも行く末が気になるのだ。

指先は木のヤニで黒く染まる。「洗っても洗っても取れないんだよね。ちょっといいレストランとか行くとびっくりされる」。目尻に笑いじわを刻む。

庭師として修業し始めた頃は手袋を着けると生意気だと言われた。今はそんな時代ではないし、もうベテランだ。それでも手袋は着けない。「素手でいいよ。慣れちゃったから。感覚が変わっちゃうもん」

やる前に見切った字幕翻訳と違って、庭師の仕事はいくらやっても分かった気がしない。敷地を植栽で埋め尽くしても、石一つ置いただけでも庭になる。正解はないし、変わり続ける。「字幕も本当は難しかったんだろうな。でも、俺には庭だな」

寒風に顔を伏せる日も、日差しが肌を刺す日も。土をならして、木を植えて、石を据える。そんな毎日を気に入っている。

「みなとの町へ」広田 郁世

アメリカの批評家、スーザン・ソンタグが「庭は、過去はもはや重荷ではないという感情を呼び覚ましてくれます」という言葉を残しています。確かに、日々姿を変える庭を眺めていると、心が解放されるように感じます。庭を守ったり、造ったりするのは、効率が優先される社会への小さな抵抗なのかもしれません。

「虹」第８巻 販売中

最新刊の第８巻「虹　誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076（445）3352（平日午前９時～午後５時）。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933―0911 高岡市あわら町13―50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766－25－7773
mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は３月１日（金）です。

紙面提供／人と鉄のあいだに
OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局